

バリアフリーに配慮した公園と遊具が完成

セントラルハイランズ市との末永い友好を誓う

市の国際姉妹都市のオーストラリアのセントラルハイランズ市(以後、セ市)が整備した「オーストラリア ジャパン フレンドシップ パーク」の開園式は10月10日、市内狐禅寺の一閑遊水地記念緑地公園で行われ、両市の末永い友好を誓いました。

開園式には、セ市のピーター・マグワイヤー市長、勝部修市長、両市の関係者ら約100人が出席。テープカットで開園を祝いました。記念碑の除幕も行われ、出席者が園内を回り、車いす用ブランコなどを見学しました。

同公園は、セ市が整備。車いすのまま利用できるブランコは国内初の設置で、スロープ付きの滑り台や柔らかい素材を使用した敷地内の舗装など、障がいの有無に関わらず利用できるよう工夫されています。

千葉一歩さん(中里・25)は、母の淑子さんの介助で車いすに乗ったままブランコを利用。淑子さんは「操作も簡単で、車いすでも安心。本人もうれしそう」と話していました。同日は、子供や親子連れが早速遊具を利用していました。

合併前の藤沢町が、セ市と合併前のデュアリング町に日本庭園とセミナーハウスを整備しています。



1 秋晴れの下、約100人がセ市との末永い友好を誓いました／2 車いすのまま利用できるブランコ。敷地内の舗装は柔らかい素材を使用しています／3 遊具で遊ぶ子供たち／4、5 1998年に合併前の藤沢町が整備した日本庭園とセミナーハウス。藤沢町とデュアリング町は、互いの地に互いの国の公園や文化を伝えるランドマークを建設することに合意。施設を整備しました

33万4千人の心とお腹を満たす大イベント

食を通じて古里の魅力を発信

ご当地グルメによるまちおこしの祭典「第10回B-1グランプリin十和田」は10月3、4日の両日、十和田市内で行われました。本市からは、昨年に引き続き「いちのせきハラミ焼なじよったべ隊」が出展。自慢の料理とパフォーマンスで古里一関を全国に発信しました。10回目の今大会には、全国33道府県から62団体が出展。2日間で33万4千人(主催団体発表)が来場しました。ボランティアとして同隊の応援に駆け付けた加藤孝人さん(室根町・72)は「昨年に引き続き良い経験をしました。若い人たちの古里を売り込もうとする意気込みに涙が出ました」と話し、食を通じて絆を深めました。



過去最高の参加者に沸く  
黄金色の田園の中をランナーが快走

第34回一関国際ハーフマラソン大会は9月27日、市総合体育館を発着点に開かれ、刈り取りを控えた黄金色の田園の中をランナーが快走しました。大会は38部門(ハーフ、10km、5km)の3部門男女年齢別で争われ、過去最多となる2,649人が出場しました。当日は晴天に恵まれ気温は26.5度まで上昇。選手は暑さと戦いながら、自己記録の更新を目指していました。横浜市から仲間8人で参加した長谷部正夫さん(66)は、「昨年に引き続き2回目の参加。暑さは大変でしたが景色もよく、気持ちよく走れました」と大粒の汗を拭っていました。

見守る父母らを笑顔にした「晴れが一番」  
健やかな成長を祈願、赤ちゃん相撲大会

第13回みちのくせんまや赤ちゃん相撲大会(愛宕花相撲保存会主催)は10月11日、千厩町の愛宕神社神楽殿で開かれました。同大会は地元で愛宕花相撲を継承する同保存会が2003年から毎年開催。国内外から集まった281人の豆力士たちの取組に、会場は温かな笑顔に包まれました。かみしも姿の親方に抱えられた豆力士たちは、行司の「ドッコイ、ドッコイ、ドッコイナ」の掛け声で顔を見合わせ、笑った方の勝ちとなります。大東町の石川公さん(41)と久美子さん(41)夫妻は娘の美穂ちゃん(1)と参加。「元気で明るい子に育てほしいです」と目を細めていました。



一関文化センターで「第26回東日本合唱祭」  
ハーモニーの競演が「合唱のまち・一関」を彩る

「合唱のまち・一関」の秋の風物詩「第26回東日本合唱祭」(同実行委員会主催)は10月10日、一関文化センターで開かれ、出演5団体の美しいハーモニーが会場を魅了しました。今年は、一関二高音楽部を含む5つの招聘団体が出演。このうち、東京ウィメンズ・コーラル・ソサエティ(東京都)は一高附属中との合同合唱を披露しました。同中3年の千葉紀香さんは「全国の皆さんと合唱を通して交流できる機会。合唱の素晴らしさを再確認できました」とほほ笑みました。後半には、市内合唱団と出演5団体による恒例の合同合唱が、客席も参加し、約千人の壮大なハーモニーがフィナーレを飾りました。

終戦から70年目の「市戦没者追悼式」に200人が参列  
戦没者の冥福を祈り、平和への誓い新たに

一関市戦没者追悼式は10月8日、一関文化センターで行われ、市、市議会や遺族など約550人が祭壇に手を合わせ、戦没者4606柱の冥福を祈りました。式辞で勝部修市長は「先の大戦から70年。戦争の記憶の継承は、戦後を生きる私たちの務め」ときっぱり。小山賢和市遺族連合会会長は「戦後は終わっていない。戦争の悲惨さ、国民の苦しみ、遺族の悲しみを後世に伝えていかなければ」と追悼の言葉を述べました。続いて、市長、来賓、遺族らが次々に献花台に花を手向け、戦没者を悼みました。最後に、一関一高音楽部が合唱曲2曲を披露。平和への誓いを新たにしました。



戦国時代の軍議を現代に再現  
1万5千人を魅了した歴史絵巻

葛西氏の重臣・千葉一族の壮大な軍議を再現した「第15回唐梅館絵巻」は9月27日、唐梅館総合公園などで行われ、訪れた1万3千人の観客を魅了しました。同絵巻は、唐梅館(長坂城)を居城とした千葉一族が、天正18(1590)年に豊臣秀吉が下した小田原参陣の命に従うか否かを決する場面を再現する催し。総大将を務めた俳優の保阪尚希さんが、豊臣軍との対決の口上を読み上げ、総勢333人の武将らが氣勢を上げると、会場は熱気に包まれました。前日には長坂商店街で前夜祭を開催。2日間で1万5千人が訪れ、現代に再現された戦国絵巻を楽しみました。